



左が第1号の絵、すべての作品がB4の用紙にフェルトペン（サインペン）で色鮮やかに描かれている



亡き弟の思い出から描き始めた絵が 398 枚に

① Interview

日立自動車教習所代表取締役 荒畑忠弘さん

小学生の頃から絵が得意で、描くのが大好きだったという才能に火をつけたのだろうか。以来12年にわたり、思い

始めたのは弟の喜一さんの死がきっかけだった。脳神経内科の医師であった喜一さんが平成12年、54歳で亡くなった。荒畑さんは姉二人、弟一人、妹二人の6人兄弟。1歳違いの弟、喜一さんとは幼い頃からいつでも一緒の仲の良い兄弟だった。

喜一さんの死後、ぼっかり空いた心の穴を埋めるつもりで、弟の思い出を朝から晩まで絵に描いた。少年の頃の畑の手伝いや通学路、どろんこ遊びに面子、コマ回しなど思い出すままに……。40年間絵なんか描いたことがなかったのですが、当時は仕事のことも忘れて、夜も寝ないで、自分でもどうかしたのかと思うくらい、夢中で描いてました。



荒畑家は現在の上水本町に江戸時代の享保年間から300年近く続く旧家で、荒畑さんは10代目。かつては2万4千坪もの農地を擁する専業農家だった。父の伊左衛門さんは昭和30年、41歳の時小平町会議員となり、町へ工場を誘致することに尽力した人で、33年には日立武蔵トランジスタ工場を誘致した。伊左衛門さん自身も進取の気象に富み、35年から事業に乗り出す。丸伊興業からスタートして日立自動車教習所、ゴルフ練習場、ガソリンスタンド、ボウリング場など次々に事業を拡大していった。

荒畑さんは経理専門学校を卒業後、父の会社へ社員として入り、自動車教

旧家の跡継ぎとして

出の引き出しは尽きることなく、確かな記憶の中の情景を描き続けている。



小平はかつてスィカの名産地だった。市場へ出す前は家族総出でスィカふきの作業。

絵の中の思い出が時代を語る。398枚の絵を保存したファイルが11冊にもなった。驚かされるのはその記憶の鮮明なこと。60年も前の近所

時代の流れとともに自動車教習所以外からは手を引き、ボウリング場の跡地は現在スポーツジムに貸している。そして日立自動車教習所は昨年で創立50周年、市内外からの信頼厚い会社である。

父の伊左衛門さんは昭和30年、41歳の時小平町会議員となり、町へ工場を誘致することに尽力した人で、33年には日立武蔵トランジスタ工場を誘致した。伊左衛門さん自身も進取の気象に富み、35年から事業に乗り出す。丸伊興業からスタートして日立自動車教習所、ゴルフ練習場、ガソリンスタンド、ボウリング場など次々に事業を拡大していった。



昭和28年頃五日市街道は砂利道。米軍の戦車やジープや地ならしが列をなして通過したという。

の景色、母屋の間取り、畑の作物や収穫の様子、遠足の場所、学校行事などなど細部にわたり、イラスト風のタッチで描き込んである。そうして、そこにはいつもイガグリ頭の忠ちゃん、坊ちゃん刈りでふっくらとした弟、喜ちゃん”が登場していて、どこか楽しげだ。今でも荒畑さんの心の中には、喜ちゃんがいきいきと生き続けているのだろう。

「小学4年生から畑仕事の手伝いをやらされました。学校から帰るとすぐに野良仕事。市場にも父親に連れられ、積み荷を下ろしたり、助手をやっていました。遊びたい盛りでしたから、

イヤでね。逃げようとしたら、思いっきり頭が木にぶつかったこともありましたよ（笑）」と当時を振り返る。おばあちゃんと両親、6人の子どもたち、住み込みの手伝いの人々。長年働いていた「徳ちゃん」はいつも煙管をくゆらせている。のんびりとして何ともユーモラスだ。大家族で共に汗を流し、収穫を喜び、食卓を囲んだ暮らし。心豊かな少年時代、家族と周りへの愛情がしみじみと伝わってくる。今では家族総出の農作業の思い出が、荒畑さんの心のふるさともなった。

家族の情景だけではなく、テレビが近所の家に初めてやってきて、力

道山のプロレス試合を見に行った日のこと。長嶋選手デビューの年に父親が後楽園に連れて行ってくれた日の感動。砂川闘争のデモを見にいった時のこと。当時の社会現象も描かれ、団塊世代前後の人たちにとっては、あの「三丁目の夕日」の映画そのままに、古き良き時代が甦るに違いない。「人に見せるためではなく、ただ思い出すままに自由に描いた絵」だからこそ、見る者にストレートに伝わる。「思い出」は遠くてこないものであっても、決して無くなるものではないことを……

「思い出」の絵たちは思い出のみに

とどまらず、当時の小平周辺を知る貴重な資料として、近頃は市内の小学校へ展示されたり、外へ向けても活躍している。荒畑さん自身も依頼されて、社会科の時間に昔の暮らしについて、話をすることもあり、教室でお孫さんにも質問されたという。あと2枚で400枚に達するけれど、多忙でなかなか時間が取れないことが目下の悩み。

「今は人とのつながりが面倒くさいと思われる世の中ですが、地元の行事などを通して、昔のような助け合いの精神が見直されるといいですね」

（小平市在住）